

最近話題となっている病害虫

熊本県農業研究センター生産環境研究所 予察指導室 中井クノ

Stemphylium lycopersici によるバレイシヨの病害

学名 : *Stemphylium lycopersici* (Enjoji) W. Yamamoto (syn. *Stemphylium floridanum* C. I. Hannon & G. F. Weber)

はじめに

Stemphylium lycopersici はトマト斑点病やピーマン白斑病を引き起こす病原菌として知られている。近年までバレイシヨ *Solanum tuberosum* L. に本種による病害が発生した記録はなかったが、中国では2016年と2017年に「Gray leaf spot」として発生が報告されている (Yang et al., 2018)。2021年3月に熊本県の春バレイシヨにおいて後述の被害が発見され、門司植物防疫所によってその病原体が本種と同定された。

病徴および形態

本病は葉身と葉柄に発生する。葉身では、はじめ周囲が黄色に縁どられた褐色の不定形斑紋が生じる。その後、斑点は2~10mmほどに拡大し、病斑部が壊死する (図1)。葉柄では黒褐色の壊そ条斑を生じる (図2)。



図1 葉に生じた病斑



図2 葉柄に生じた病斑

V8 ジュース寒天培地上に形成した分生子は淡褐色~褐色の石垣状多細胞で、先端が円錐状の俵形~長楕円形、その多くは、明瞭な3つの横隔壁部分でくびれていた (図3)。分生子の大きさは平均 $54.3 \times 17.9 \mu\text{m}$ 、縦横比は平均3.1であり、他植物で報告されている本種の形態と概ね一致する。



図3 分生子柄、分生子

発生状況

本病が発生した2021年は、3月の降雨後に上位3~5番目の複葉に病斑が多数確認された。発生地域の一部では、ほ場全体に症状が確認されたが、4月以降は拡大が認められず、病斑の痕跡は残ったものの沈静化した。発生ほ場での明らかな減収や品質低下は認められなかった。次作以降、発生は確認されておらず、発生原因は不明である。

防除対策

2022年5月現在、本病害に対する登録農薬はない。本種が感染する植物のり病残さは伝染源となる可能性があるため、離れた場所へ持ち出し適切に処分する。また、ほ場の排水を良くし、ほ場内の多湿を避けるなどの耕種的防除を行う。

参考文献：

- 石井正義 (1998) 日本植物病害大事典 (岸國平 編) 全国農村教育協会 東京 : 478-479.
 熊本県病害虫防除所 (2021) 令和3年度 (2021年度) 発生予察特殊報第1号
 Yang, H., Jiang, J., Zhao, T., Zhang, H., Xu, X., and Li, J. (2018) First report of *Stemphylium lycopersici* causing gray leaf spot on potato in China. *Pl. Dis.* 102(11): 2377.